’18

後期日程

小論文

（社会情報学部）

注　意　事　項

1. 試験開始の合図があるまで，この問題冊子を開いてはいけません。
2. 問題冊子は１冊（５頁），解答用紙は２枚，下書用紙は２枚です。落丁，乱丁，印刷不鮮明の箇所等があった場合には申し出てください。
3. 氏名と受験番号は解答用紙の所定の欄に記入してください。
4. 解答は指定の解答用紙に記入してください。
5. 解答用紙は持ち帰ってはいけません。
6. 問題冊子と下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。

何かを学んでいこうとするとき，「好き」という感覚ほど強い味方はない。一方，「嫌い」という感覚は，学びにブレーキをかける。好きなことはいくらでもできるが，嫌いなことはやりたくない，と。加えて，好きや嫌いという感覚は個人的な感覚だから，誰かに「私はリンゴが好きだ」と言ったとしても，「それは君が好きなだけ，僕はバナナが好きだ」と返される場合が少なくない。好き嫌いは何かをブロックしてひとりよがりな世界を生み出すことがあるのである。

しかし，内面でわき起こる好きや嫌いは，大切にしなければならない。それが人生をつくっていくのだから。だが何かを本当に学ぶためには，好き嫌いの感覚を，さしあたり停止して，どうして好きなのか，どうして嫌いなのかを正視しなければならない。矛盾していると思うだろう。しかし，数学の勉強が嫌いなら，どこが好きでどこが嫌いなのかを考えてみてほしい。考えることが，単なる好きや嫌いの感覚から距離を置くことを教えてくれるから。それが学ぶことの第一歩。今のうちにその術を身につけてほしい。好きだから，嫌いだからで終わってはいけない。

学ぶためのもう一つのポイントは，全体を見ること。それと同時にどこか一点を見なければならない。全体だけを見ていても絶対に自分のものにはならない。これも矛盾していると思うだろう。だがスポーツを想像すればわかりやすい。スポーツは単に肉体の問題ではない。例えば野球では，筋力を鍛えさえすればホームランを打てるわけではない。筋力だけでなく，身体全体を考え，何かポイントをつかむことでバッターとして成長できる。人はそれぞれ「癖」を持っているものだが，それを捨て，自分なりのポイントをつかむことが基本だ。

これは思考の基本でもある。人間がものを考えるとき，公理から出発することはありえない。全体のコンテクストをぼんやりと視野に入れながら，その中で手がかりを見つけて考えを進める。A＝B，B＝C，C＝A といったような論理は，考え抜いたあとで，他者に説明するために組み立てる表現だ。事件現場に立つシャーロック・ホームズを想像してほしい。彼は，現場全体を見ながら，頭の中ではそれまでに集めた証拠品のイメージや証言を繰り返していることだろう。全体を見ながら，どこかに特異点を見いだそうとしているのである。さまざまな要素があり，それらがどういう関係

にあるのか，そしてそれらの関係がどう全体をかたちづくっているのかを見ていくのである。

こうした思考は，数学でも国語でも，研究でもビジネスの現場でも変わらない。「文科系と理科系ではアタマの使い方が異なる」などと思い込んではならない。原則は同じなのだ。文章全体を見ていながら，どこかに必ず文章全体にかかわるひっかかりがあるはずだ。それをつかむ。そのポイントを自分なりに展開することで人間はものを考え始めることができる。学校の勉強には正解が用意されている。皆さんが誤った答案を書けば，間違いを指摘される。①だが皆さんに課されているのは，正解を知ることではなく，頭の働かせ方を学ぶことだ。この学びは，たんに知識を蓄えることではなく，自分自身を変えていくことにほかならない。全体のコンテクストがあり，その特異点をつかんで全体をもう一回つくり直す。これは自分の世界を自分でつくり直していく力でもある。

どのような大学に進み，どのような職業を選ぼうとも，人間は一生，学ぶことから逃れられない。人間は，決して完成しない存在なのだ。しかし，それでも完成してしまったらどうすべきだろう。実は，完成は壊さなくてはならない。

画家のパブロ・ピカソ Pablo Picasso（1881 − 1973）は，14 歳のとき，《初聖体拝領》（1896）という作品を描いている。父親に付き添われ聖体拝領を受けるために，跪（ひざまず）いて聖書を読み上げる少女の姿。厳粛な一瞬を美事（みごと）に捉（つか）まえている。レースや絨緞（じゅうたん）の繊細な質感を見ても分かる通り，ルネサンス期に活躍した一流の画家たちに比肩する技量だ。14 歳にしてそのようなレベルの絵を描いてしまったら，それから先，画家としてどう生きていったらいいのだろう。それがピカソの問題だった。結論をいえば，彼は完成した自分自身を「壊した」。どう壊したのかを見ていこう。

ピカソは 20 歳を過ぎた頃，《盲人の食事》（1903）という作品を描いた。画中の人物はスペインの貧民で，目がほとんど見えず手でものに触れようとしている。ピカソは，単に盲人を描きたかったのではない。彼にとっての問題は，盲人の「姿」ではなく「目が見えないということ」だった。目が見えなければ，絵を見ることはできない。目が見えるということこそが，絵画の原点なのである。14 歳にしてすでに絵画における最高の技法を獲得していたピカソは，絵画が生まれるとは一体どういうことなの

か，絵画とは何かと問い，その原点，すなわち「目が見える」ということに立ち返り，絵画そのものをもう一度やり直し，それが成立する場を考えようとした。

ピカソがそれに取り組んだ時期は「青の時代」と呼ばれる。彼が絵を青一色で描いたからだが，青一色というのは，ほとんど目の見えない人がかすかに感じる色なのだという。ピカソは盲人ではない。けれども，青一色で描くことによって絵画の原点の経験をつくり出そうとしたのである。この「やり直す力」こそ，ピカソが天才と呼ばれる理由だ。

もう一つ，やり直そうとしたことがある。《盲人の食事》に描かれている年老いた盲人の食事はパン一つだけ。これは社会の最底辺を生きる姿であり，《初聖体拝領》で宗教的な儀式に臨むブルジョアジーのきらびやかさとはきわめて対照的だ。ピカソは，最も悲しく，苦しい，絶望的な場所から再出発して絵画そのものをすべてやり直そうとしていたのである。

その後，ピカソは《ゲルニカ》(1937)という巨大な絵を描いた。ゲルニカとは，第二次世界大戦中にナチスドイツに爆撃されたスペインの小さな町である。ピカソは爆撃に怒り，これを描いたのだが，実はそれまで絵画と戦争にはほとんど何の関係もなかったのである。戦争に対して直接に抗議する絵画はこの《ゲルニカ》が――おそらくゴヤという偉大な先例を除けば――最初であり，ピカソは，絵画という営為の幅をつくり替えていったのだ。

学問もスポーツも，人間がつくり出した営みのほとんどはある意味では 14 歳で世界の頂点に立つこともできるのかもしれない。もちろん皆さんはピカソではないかもしれない。けれども，②彼のように「もう一度やり直す力」は誰にでもある。すでにできあがっているものを学びながら，既存の世界を超える新しい世界をつくっていく力だ。

今の皆さんだけが感じることができる，世界の中で生きていることに対する違和感。そして，世界と自分の間に感じられる越えがたいズレ。その中にすべての「種」が詰まっている。世界に対して脳を開き，「あれは一体何なのか？」「これはおもしろい！」「どうしてこれに興味を引かれるのだろう？」といった，自分にしかわからない小さな違和感や疑問を大切にとっておいてほしい。それが皆さんの大きな役目だ。学

校の勉強は，無味乾燥に感じるかもしれない。しかしその中にも「種」はあり，将来，花開く仕掛けが数多く詰まっている。考え抜き，心の中に「種」を宿しておくことが今はとても大切だ。

私は今，主に現代哲学を勉強している。だが大学にはもともと物理学を志して入学した。いくつかの理由で文科系に移籍，フランス語を学んだ。しかし卒業論文のテーマには絵画を選んだ。ということを思うと，中学二年生のとき，国立美術館のピカソ展で生まれて初めてピカソの絵を見たときの強い印象やそのとき抱いたアートへのあこがれ，そして同展について学校新聞に文章を書いたことなどがずっと心に残っていて，あるとき甦(よみがえ)ってきたのだなあ，と感じる。学ぶ意志さえあれば，どのような「種」も花開いてくる。学びとは一時の行いではなく，人生を変える一生の問題なのだ。

学ぶということから，人間は逃れられない。人間のニューロンは，歳をとっても少しずつ新生し続けるという。どうやら我々は生物学的にも学び続けることを運命づけられているようだが，人間は，自己の非自然的なあり方に由来する「自由」のもとに学ぶからこそ「人間」なのだ。言い換えれば，学ぶことは，自分が人間として今ここで生き，存在しているということと分かちがたく結びついている。しかしその学びは，決して完成しない。ひとたび完成したならば，次なる完成に向けて自分自身をつくり替えながら学んでいかなくてはならないから。その意味で人間とは，「途上の存在」にほかならず，常に道半ばなのである。学ぶことは，自分をつくり替えることであり，世界をつくり替えること。今このことを感覚できれば，それが一生の力になるだろう。

出典：小林康夫「学ぶことの根拠」(外山滋比古・前田英樹・今福龍太・茂木健一郎・本川達雄・小林康夫・鷲田清一(著)桐光学園・ちくまプリマー新書編集部(編集)『何のために「学ぶ」のか：〈中学生からの大学講義〉1』2015年ちくまプリマー新書)

(出題の都合上，原文の表記を変更した箇所がある)

問１　下線部①に関して，本文では画家ピカソの事例が紹介されているが，ピカソは絵画という営為の幅をどのようにつくり替えていったかを説明しなさい。（400字程度）

問２　下線部②に関して，この力はどのようにしたら身につくと思うか，本文の内容を参考にあなたの考えを述べなさい。（600字程度）